

平成25年度 五泉市図画工作部 活動報告

部長 間嶋 紀子(五泉市立愛宕小学校)

1 活動のねらい

- ・ 個性的な表現を生み出す手立ての研修を深める。

2 活動内容

(1) 実技研修 木彫の技法(6月)

講師 (株) クラフテリオ 土井 麻貴様

2学期から3学期にかけて版画や木工の題材が多く取り入れられる。そこで、講師の方から彫刻刀の効果的な使い方について教えていただいた。

小さな木板に葉っぱの絵を描き、その下絵に沿っていろいろな彫刻刀を使い、掘り出していった。下絵のとおり掘り出していく方法の一つとして、線の少し外側を「切り出し」で深く切り出していくことを教えていただいた。切り出しの使い方については、今まで認識していた方法と違っていただけであり、今後指導していく上で大変参考になった。



(2) 研究授業(9月)

- ア 単元名 「スーホの白い馬」(物語の絵をかこう)
- イ 単元の目標 スピード感あふれる競馬の場面を絵に表す。
- ウ 授業者 磯部 範子教諭 (愛宕小学校)
- エ 授業の概要

本単元では、「スーホの白い馬」というお話を聞き、迫力ある場面はどこか話し合い、白馬が競馬の大会に出場している場面を描くというものである。

子どもたちは、「スピード感あふれる絵を描こう」という問いかけから、想像を膨らませて絵を描いていく。白馬を描く際には、白馬の顔の向き・足の動きにどんなパターンがあるかなどを子どもたち同士で、十分に話し合わせ、さらに想像を膨らませてから描くようにした。また、主人公のスーホに関しても、体の向きや手の動き・服の模様についても話し合い活動を十分にした後で描くようにした。

本時では、白馬の色をぬろうということで、完成した下絵に初めて彩色をする活動であった。

本時では活動の前に、「白馬が目立つようにするためにはどんな色でどのようにぬればよいのか。」について、子どもに考えさせ、意見を交換させていた。子ども



たちからは、「白馬なんだから白でぬればいいよ。」「全部白はつまらないから、色を変えてもいいかもしれないな。」「白い色が目立つように少し色を濃くぬったほうがいいよ。」などの意見が出ていた。話し合い活動の後、実際に白馬に色をつけていった。

子どもたちには、線をぬらないこと・筆をおくようにしてぬること・色を変えるときは、赤・青・黄を少し混ぜてもよいこと・しっぽの部分は線と線の間をぬることを確認してから活動に入った。子どもたちは、さまざまな場所からていねいに色をつけていく様子が見られた。しかし、色を少しずつ変えるという感覚が難しく、赤・青・黄を模様のように入れている子どもが見られた。



ある程度ぬり進めたところで、「友達のぬりかたを見てみよう」ということで、自分の活動をやめ、友達のぬりかたを見て回る活動に入った。子どもたちは、「このぬりかたがいいね。」「ぼくのぬりかたは薄いかな。」「わたしも青を入れてみようかな。」など友達の作品を見て、自分と比べたり友達のいいところを見つけたりすることができた。

現指導要領では、言語活動が重視されている。本時では、図工の共通事項「色・形・イメージ」についての意見が子どもたちの言葉で多く語られていた。話し合う活動を通し、子どもたちは想像をさらに広げ、絵に生かすことのできた実践であった。また、同じ手順で活動してもそれぞれ個性的な作品に仕上がるのだと感じた。

(3) 新津美術館作品鑑賞(10月)

「日本画の現在 20年後の“横の会展”」の鑑賞

この展覧会には、所属団体や師弟関係という縦のつながりをこえて、横の連携を取り合うことにより新しい日本画を生み出そうとした日本画グループ「横の会」のメンバーによって描かれた絵画が展示してあった。「横の会」の作品の特徴は、作品の大きさで作家が大きさにとらわれることなく、自由に描いた作品であるということだ。展示されていた作品の中には、何枚かのパネルを組み合わせ描いてある10メートル近くあるものもあった。しかし、どの作品も色使いや描き方は細部にわたってすばらしく、色の塗り方や構図などは指導する上で、参考になる部分が多くあった。特に人物は、写実的な要素が強く子どもたちの鑑賞教材としても価値があると感じた。



3 成果と課題

研究授業では、絵画指導についてどのような指導が効果的であるかについて研修を深めることができた。子どもの思いを引き出し描かせていくことが最も大切であるが、子ども自身が満足する絵が描けるよう教師自身がいろいろな技法を学び、子どもたちに絵の技法をしっかりと指導するようになっていきたい。

また、実技講習と美術鑑賞では、図工の指導に参考になることが多くあった。実技指導で教えていただいたことは、すぐに授業に取り入れ、大いに役立ったとの報告があった。